

1．固定的性役割観とは

本調査の大きな目的は、平成13年度から17年度に実施する新行動計画のための基礎資料を作成するために、男女共同参画を阻害している要因を明らかにすることである。

そこで、本章では、男女共同参画を阻害している要因のうち、固定的性役割観に焦点を当て、それに関連、あるいは影響を与える要因を検討したい。固定的性役割観とは、生まれつき男女間には非常に大きな違いがあると考え、そのため、日常生活における適性や社会的に望まれる役割行動は、男女によって決定的に異なると考える。つまり社会生活の中で人々の間にみられる差異を、男女の性別に基づいてとらえようとする。固定的性役割観が強いと、なぜ、男女共同参画を阻害することになるのか。まず第1に、固定的性役割観は、いわゆる「男は仕事、女は家庭」といった家庭内での夫婦の役割分業を肯定する。その結果、女性（妻）が社会へ参画する機会が阻害される。第2に、現在の男性中心に運営されている職場環境に対して、疑問を感じる事が少ない。そのため固定的性役割観が強い人は、改善のためのアクションをおこさない。

反対に、固定的性役割観が弱いということは、社会にみられる性役割（これをジェンダーという）に縛られた考え方をしないことを意味し、いわば、ジェンダー・フリー度が高いことになる。ジェンダー・フリーな個人が増えれば、社会全体も男女共同参画社会に近づくことができる。ここで、男女共同参画社会をめざすという目標を考えた場合、個人をジェンダー・フリーにさせる要因を見つける、という視点を持つことは、より建設的な姿勢である。

2．ジェンダー・フリー度の個人差の測定

本調査では、伊藤裕子氏を主任研究員として行われた、東京女性財団による平成6、7年度の課題研究「性差意識の形成環境に関する研究」の調査の中より「性差観スケール」の8項目を抜粋し、これにより、市民一人一人の固定的性役割観を測定した。そして、固定的性役割観が弱い（ジェンダー・フリー度が高い）ことは何と関連するかを検討した。

具体的な調査項目は、次の通りである。

これら8項目は、性差観の個人差が顕著に表れると考えられる、限界状況における男女の適性に関する考え方を問うたものである。 から までは、緊急事態や危機に直面した時の男性の力、パワーをどのくらい大きく見積もるかについて取り上げている。 から までは、女性は母親として生きるのが最も適していると考えられる傾向について取り上げている。

【性差観スケール項目（東京女性財団、1996より）】

人から危害を加えられそうになったとき、身を守るには、やはり男でないとだめだと思う。
大地震や火事など緊急事態のとき、その場を取り仕切るのは、やはり男でないとだめだと思う。

重いものを運んでもらうとき、やはり男でないとだめだと思う。

自分が病気や介護を必要とするとき、やはり女性に面倒をみてもらいたいと思う。

健康や生活に関わることがらに敏感なのは、女性だと思う。

子どもが病気などで苦しんでいるとき、それをわがこととして感じ取れるのは、やはり母親だと思う。

生活者優先の政治を本当に推し進められるのは、やはり女性議員だと思う。

子どものちょっとした変化に気づくのは、やはり母親だと思う。

3. ジェンダー・フリー度の高低で回答結果にこんな差が見られる

ジェンダー・フリー度の高低に関係していると思われる以下の6つの項目について調べた。その6つの項目とは、1. 子育て不安、2. 家事、3. 夫婦関係、4. 暴力、5. 健康、6. 行政施策・サービスであった。

〔1〕子育て不安

問 17-3 の設問 1~7 では子どもを育てていた(育てている)ころの不安について聞いた。子育て不安と属性を比較したところ、年齢、家族の人数、末子の年齢において統計的に意味のある差が見られた。

< 男女別・子育て不安の高低と回答者の属性との比較 >

子育て世代ほど子育て不安が高い

回答者の年齢と子育て不安の高低を比較した。その結果、子育て不安は20才代でもっとも多く、30代、40代と年齢が上がるにつれ、徐々にその数が減っていった。50才代で子育て不安の高い人、低い人の割合がほぼ同数となった。60才、70才以上では子育て不安の低い人が多くなった。

この結果より、一般に子育て世代ほど子育て不安が高く、子育てを終えると子育て不安は低くなっていくことがわかった。この傾向が男女ともに見られた。

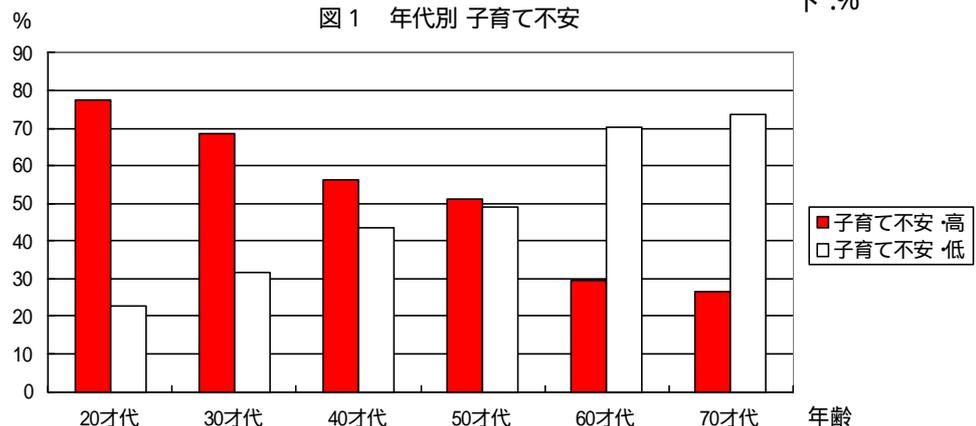
表1 年代別 子育て不安

	合計	子育て不安 高	子育て不安 低
合計	839	435	404
	100	51.9	48.2
20才代	22	17	5
	2.6	77.3	22.7
30才代	174	119	55
	20.7	68.4	31.6
40才代	266	150	116
	31.7	56.4	43.6
50才代	184	94	90
	21.9	51.1	48.9
60才代	125	37	88
	14.9	29.6	70.4
70才代	68	18	50
	8.1	26.5	73.5

2=69.3 p<.01

上:実数
下:%

図1 年代別 子育て不安



子どものいる世帯の女性ほど子育て不安が高い

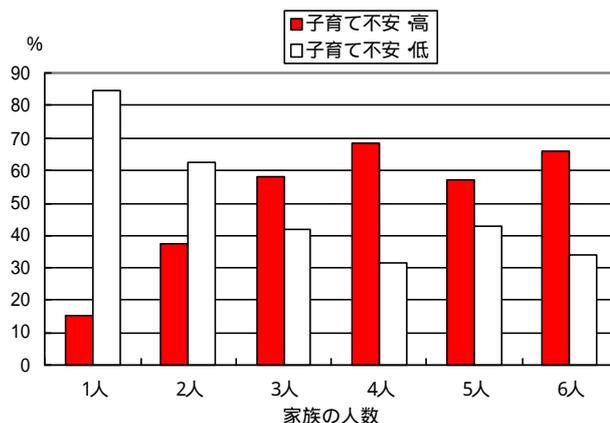
次に家族の人数と子育て不安の高低を比較したところ、女性で統計的に意味のある差が見られた。家族の人数が1人、2人は子育て不安が低い人が多かった。家族の人数が3人を越えると子育て不安の高い人が多くなった。一番不安が高かったのが4人および6人、その次に高かったのが3人および5人であった。つまり実際に子育てをしていると思われる世帯で子育て不安が高い事がわかった。

表2 家族の人数別 子育て不安 / 女性の回答

	合計	子育て不安 高	子育て不安 低
合計	466	275	191
	100	59.0	41.0
1人	13	2	11
	2.8	15.4	84.6
2人	56	21	35
	12.0	37.5	62.5
3人	105	61	44
	22.5	58.1	41.9
4人	172	118	54
	36.9	68.6	31.4
5人	70	40	30
	15.0	57.1	42.9
6人以上	50	33	17
	10.7	66.0	34.0

2=28.6 p<.01 上 実数
下 :%

図2 家族の人数別 子育て不安 / 女性の回答



末子の年齢が9才までの世帯が、子育て不安が高い

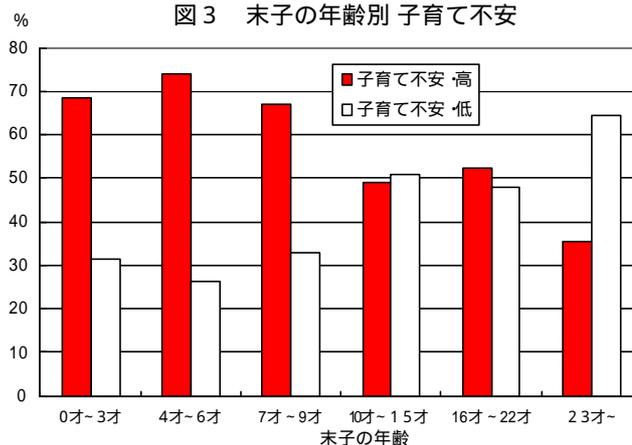
さらに末子の年齢と比較した。0~9才まででは子育て不安の高い人が非常に多かった。10~22才まででは子育て不安の高い人と低い人の割合がほぼ同数だった。23才を越えると子育て不安の低い人が際立って多くなった。この傾向が男女ともに見られた。

表3 末子の年齢別 子育て不安

	合計	子育て不安 高	子育て不安 低
合計	841	432	409
	100	51.4	48.6
0~3才	111	76	35
	13.2	68.5	31.5
4~6才	65	48	17
	7.7	73.9	26.2
7~9才	88	59	29
	10.5	67.1	33.0
10~15才	157	77	80
	18.7	49.0	51.0
16~22才	136	71	65
	16.2	52.2	47.8
23才以上	284	101	183
	33.8	35.6	64.4

2=63.6 p<.01 上 実数
下 :%

図3 末子の年齢別 子育て不安



〔 2 〕 家事

ジェンダー・フリー度の高低によって回答の傾向に差が見られたのは、問 3「あなたが家事をする理由」、問 5 の設問 1~4「家事の分担意識」であった。因みに問 2「家事をする時間」、問 4「子どものころの手伝い経験の有無」についてはジェンダー・フリー度は影響を与えていなかった。

(1) 家事をする理由：ジェンダー・フリー度の高い女性は、あきらめ・分担するもの

ジェンダー・フリー度の低い女性は、仕事だから・楽しいから

問 3 では家事をする理由をたずねた。「その他」をのぞく選択肢 6 つを 4 つのカテゴリーに再分類した。「それが主な私の仕事だから」を“仕事だから”、「家事を分担するのは当然だから」を“分担するもの”、「配偶者（または家族）が喜ぶから」「配偶者（または家族）の望む事だから」「やっつけて楽しいから」を“楽しいから”、「仕方なく」を“あきらめ”の 4 カテゴリーに分けて、ジェンダー・フリー度の高低と比べた。

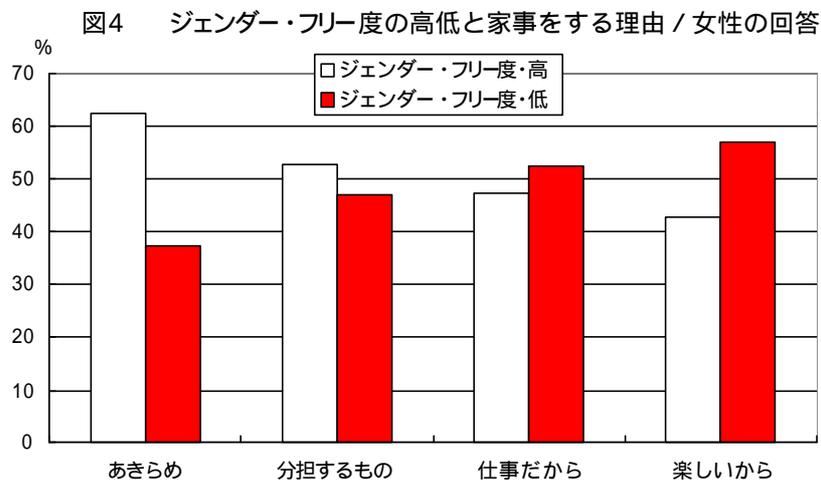
その結果、回答者が女性の場合、統計的に意味のある差が見られた。ジェンダー・フリー度の高い女性では、「あきらめ」「分担するもの」と答える人が多かった。ジェンダー・フリー度の低い女性では、家事をする理由を「仕事だから」「楽しいから」とする人が多かった。

これは、ジェンダー・フリー度の高い女性では、家事は分担するものであるとは思っているが、女性が主に家事をする役目にあたっていることにあきらめの気持ちを持っている事がわかった。また、ジェンダー・フリー度の低い女性では家事は自分がして当然であり、そのことに楽しみを感じていることがわかった。

表 4 ジェンダー・フリー度の高低と家事をする理由 / 女性の回答

	合計	あきらめ	分担するもの	仕事だから	楽しいから
合計	446	144	91	190	21
	100	32.3	20.4	42.6	4.71
ジェンダー・フリー度 高	237	90	48	90	9
	53.1	62.5	52.8	47.4	42.9
ジェンダー・フリー度 低	209	54	43	100	12
	46.9	37.5	47.3	52.6	57.1

2= 8.5 p<.05 上 実数
下 %



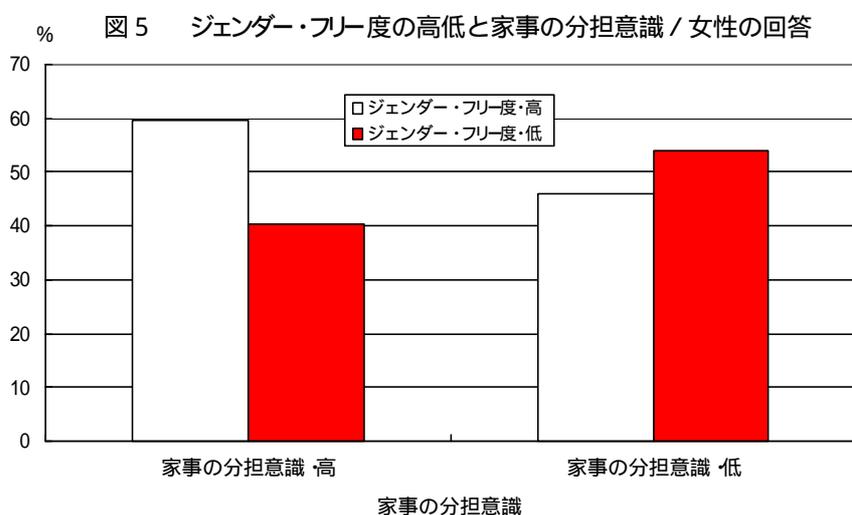
(2) 家事の分担意識：ジェンダー・フリー度の高い女性は家事の分担意識が高い

問 5 の設問 1~4 では家事の分担意識を聞いている。この結果をジェンダー・フリー度の高低と比べたところ、女性で統計的に意味のある差が見られた。ジェンダー・フリー度の高い女性は家事の分担意識の高い人が多かった。反対にジェンダー・フリー度の低い人は家事の分担意識の低い人が多かった。

表 5 ジェンダー・フリー度の高低と家事の分担意識 / 女性の回答

	合計	家事の分担意識 高	家事の分担意識 低
合計	471	243	228
	100	51.6	48.4
ジェンダー・フリー度 高	250	145	105
	53.1	59.7	46.1
ジェンダー・フリー度 低	221	98	123
	46.9	40.3	54.0

2=8.7 p<.01 上 実数
下 :%



〔 3 〕 夫婦関係

配偶者の呼び方：ジェンダー・フリー度の高い男性は、「妻」「嫁」を使う傾向あり

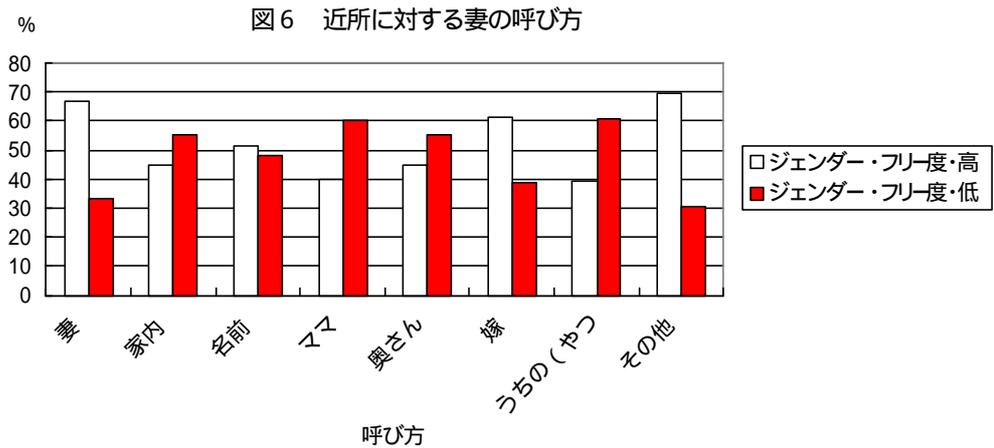
ジェンダー・フリー度の低い男性は、「うちのやつ」「ママ」「奥さん」「家内」を使う傾向あり

問 7-1、問 7-2 では、配偶者を普段どう呼んでいるか「職場の人に対して」「友だち・近所の人に対して」「家庭では」に分けてたずねた。ジェンダー・フリー度の高低と比較すると、男性が「友だち・近所の人に対して」配偶者を呼ぶ際の呼び方に統計的に意味のある差が見られた。回答者男性全体の 1% 以下の人数しか使っていない呼び方を除き、図表化した。その結果、名前で呼ぶ人にはジェンダー・フリー度の高低差はあまり見られなかったが、「妻」「嫁」はジェンダー・フリー度の高い人が使う傾向が見られた。反対にジェンダー・フリー度の低い男性は「うちのやつ」「ママ」「奥さん」「家内」の順に使う傾向があった。

表6 ジェンダー・フリー度の高低と近所に対する配偶者の呼び方 / 男性の回答

	合計	妻	家内	名前	ママ	奥さん	嫁	うちの(やつ)	その他
合計	441	12	157	31	15	29	136	38	23
	100	2.7	35.6	7.0	3.4	6.6	30.8	8.6	5.2
ジェンダー・フリー度 高	227	8	70	16	6	13	83	15	16
	51.5	66.7	44.6	51.6	40	44.8	61.0	39.5	69.6
ジェンダー・フリー度 低	214	4	87	15	9	16	53	23	7
	48.5	33.3	55.4	48.4	60.0	55.2	39.0	60.5	30.4

2=15.6 p<.05 上:実数 下:%



〔4〕暴力

ジェンダーにかかわる3つの暴力「ドメスティック・バイオレンス(家庭内暴力)」「児童虐待」「セクハラ」について聞いた。回答パターンの分析から家庭内暴力を現実のものとして認知する(DV 覚知)とDVの存在そのものを否定する(DV 否認)の二つの要因が抽出された。

この中でジェンダー・フリー度の高低で回答傾向に差が見られたのは「DV 否認」であった。「DV 覚知」「児童虐待」「セクハラ」に関しては差は見られなかった。

(1) ドメスティック・バイオレンス(家庭内暴力): DV 覚知とDV 否認

問30ではドメスティック・バイオレンス(家庭内暴力)に対する態度を聞いている。回答方法が「はい」「いいえ」「わからない」であるため、まずコレスポネンス分析を行なったところ、設問1,2,5,6と設問3,4は、同じドメスティック・バイオレンスに対する態度でも異なった二つの独立の要素を測っている事がわかった。設問の内容から、1,2,5,6はDV 覚知(家庭内暴力を現実のものとして認知していること)、3,4はDV 否認(家庭内暴力は何か他に原因があって生じるもので、特別なものではないとその存在を否定すること)を測っていると解釈した。

- DV 覚知 ドメスティックバイオレンス（DV、または家庭内暴力）という言葉を知っている
 配偶者・恋人から暴力を受けた人が身近にいる
 配偶者・恋人から暴力を受けたら、すぐに相手との関係を絶つべきだと思ふ
 配偶者・恋人から暴力を受けたら誰かに相談する
- DV 否認 配偶者・恋人からの暴力はただのけんかにすぎないと思ふ
 人から暴力を受ける人はその人自身にも原因があると思ふ

ここで注目すべきことは、たとえば DV 覚知が高いからといって、必ずしも DV 否認が低いとは限らない。また DV 否認が高いからといって、DV 覚知が低いわけではない。つまり DV 覚知と DV 否認は独立していた。

<ジェンダー・フリー度の高低と DV 否認・DV 覚知の高低の比較>

ジェンダー・フリー度の高低と DV 覚知を比較したところ、統計的に意味のある差は見られなかった。

ジェンダー・フリー度の低い人では、DV は存在しないものと否認する人が多い

ジェンダー・フリー度の高い人では DV 否認の高低に大きな差は見られなかったが、ジェンダー・フリー度の低い人では、DV 否認の強い人が多かった。

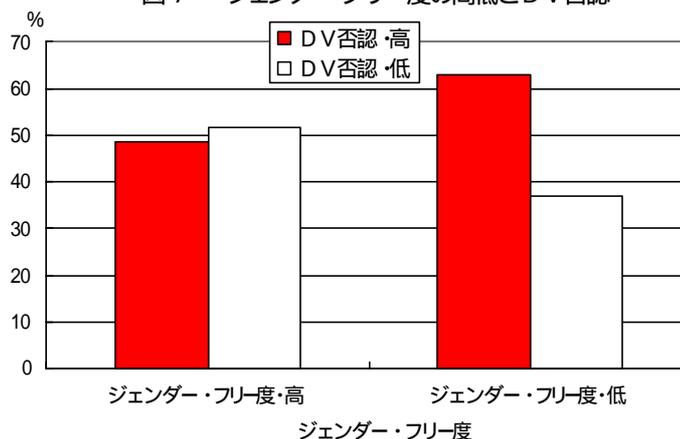
家庭内暴力のおこる原因は、家庭内で権力関係があるためといわれている。被害を受ける人は社会の側からも抑圧的な役割を引き受けさせられている。男女の性別カテゴリーにとらわれてものごとを判断しがちなジェンダー・フリー度の低い人には、DV の現実を否定しがちな傾向があることがわかった。

表 7 ジェンダー・フリー度の高低とDV否認

	合計	DV否認 高	DV否認 低
合計	985	542	443
	100	55.0	45.0
ジェンダー・フリー度 高	539	261	278
	54.7	48.4	51.6
ジェンダー・フリー度 低	446	281	165
	45.3	63.0	37.0

上:実数
下:%

図 7 ジェンダー・フリー度の高低とDV否認



< 男女別・DV否認の高低と回答者の属性との比較 >

50～70 才代の女性で DV 否認の傾向が高い

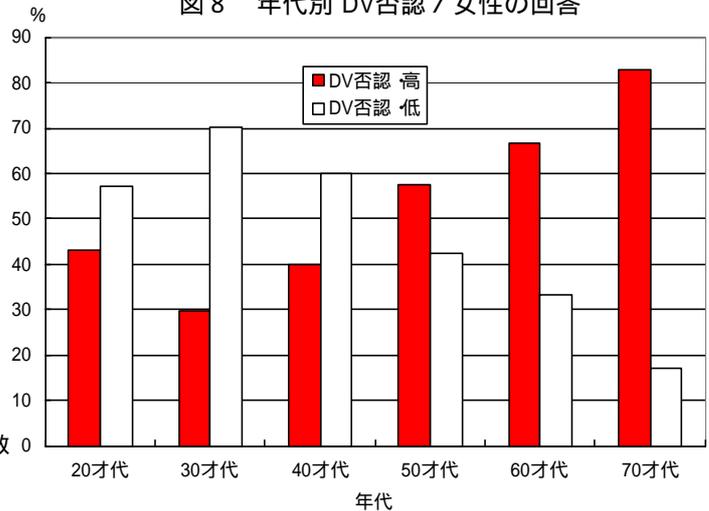
DV 否認の高低と回答者の年齢について比較してみると、女性について統計的に意味のある差が見られた。20～40 才代では DV 否認の傾向は低い、反対に 50～70 才代では DV 否認の傾向は高かった。

表 8 年代別 DV否認 / 女性の回答

	合計	DV否認 高	DV否認 低
合計	538	248	290
	100	46.1	53.9
20才代	68	29	39
	12.6	42.7	57.4
30才代	128	38	90
	23.8	29.7	70.3
40才代	158	63	95
	29.4	39.9	60.1
50才代	101	58	43
	18.8	57.4	42.6
60才代	54	36	18
	10.0	66.7	33.3
70才代	29	24	5
	5.4	82.8	17.2

2=46.8 p<.01 上:実数
下:%

図 8 年代別 DV否認 / 女性の回答



未婚・既婚（配偶者あり）の女性で DV 否認の傾向が低い

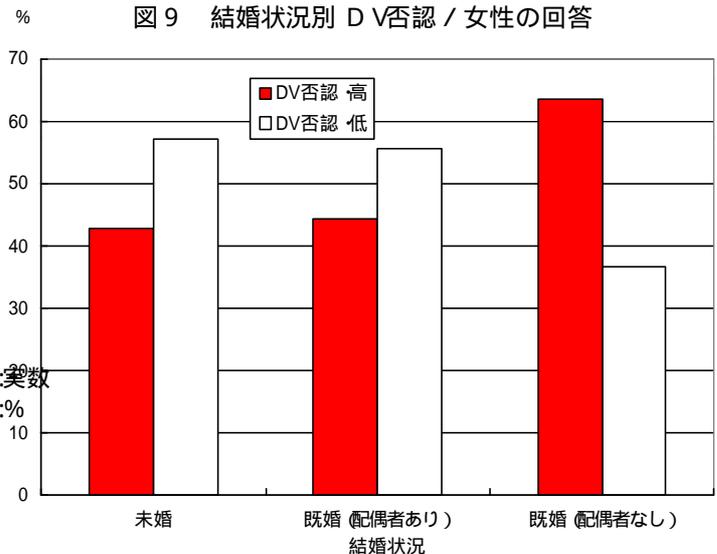
結婚状況と比較してみると、女性について有意な差が見られた。未婚・既婚（配偶者あり）では、DV 否認の傾向が低く、それに対して配偶者のいない既婚女性では DV 否認の傾向が高かった。

表 9 結婚状況別 DV否認 / 女性の回答

	合計	DV否認 高	DV否認 低
合計	537	247	290
	100	46.0	54.0
未婚	63	27	36
	11.7	42.9	57.1
既婚	422	187	235
	78.6	44.3	55.7
既婚 (配偶者なし)	52	33	19
	9.7	63.5	36.5

2=7.1 p<.05 上:実数
下:%

図 9 結婚状況別 DV否認 / 女性の回答



末子の年齢が23才以上の女性でDV否認の傾向が高い

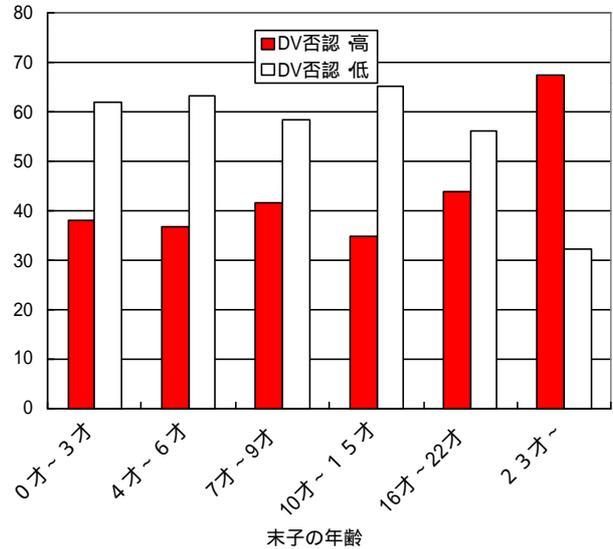
末子の年齢との比較で見ると、女性で有意な差が見られた。0～22才までの年齢の末子を持つ女性ではDV否認の傾向が低く、23才以上になるとDV否認の傾向が高かった。これは、既述した「高齢者女性ほどDV否認が高い」結果と関連しているためと思われる。

表10 末子の年齢別 DV否認 / 女性の回答

	合計	DV否認 高	DV否認 低
合計	539	248	291
	100	46.0	54.0
0～3才	163	62	101
	30.2	38.0	62.0
4～6才	38	14	24
	7.1	36.8	63.2
7～9才	53	22	31
	9.8	41.5	58.5
10～15才	83	29	54
	15.4	34.9	65.1
16～22才	66	29	37
	12.2	43.9	56.1
23才以上	136	92	44
	25.2	67.7	32.4

2=35.73 p<. 上 実数
下 :%

図10 末子の年齢別 DV否認 / 女性の回答



さらにDV覚知と回答者の属性の比較をすると年齢、結婚状況で統計的に有意な差が見られた。

< 男女別・DV覚知の高低と回答者の属性との比較 >

20～30才代の女性でDV覚知の低い人が多い

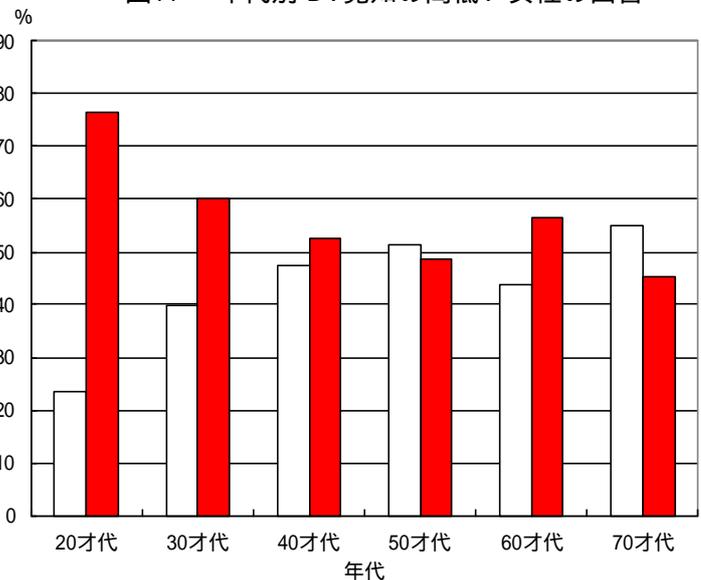
DV覚知の高低と解答者の年齢について比較してみると、女性で統計的に有意な差が見られた。20才、30才代の半数がDV覚知の低い人で占められている。40才以上になると高低であり差は見られなかった。

表11 年代別 DV覚知の高低 / 女性の回答

	合計	DV覚知 高	DV覚知 低
合計	543	236	307
	100	43.5	56.5
20才代	68	16	52
	12.5	23.5	76.5
30才代	128	51	77
	23.6	39.8	60.2
40才代	158	75	83
	29.1	47.5	52.5
50才代	103	53	50
	19.0	51.5	48.5
60才代	55	24	31
	10.1	43.6	56.4
70才代	31	17	14
	5.7	54.8	45.2

2=17.0 p<.01 上 実数
下 :%

図11 年代別 DV覚知の高低 / 女性の回答



未婚女性は圧倒的にDV 覚知（現実のものと認識している）が低い

DV 覚知と結婚状況を比較すると、女性について有意な差が見られた。未婚の女性では DV 覚知の低い人が圧倒的に多かった。既婚（配偶者あり）では、未婚の女性ほどではないが、DV 覚知の低い人が多かった。既婚（配偶者なし）では、高い人と低い人で差はさほどみられなかった。

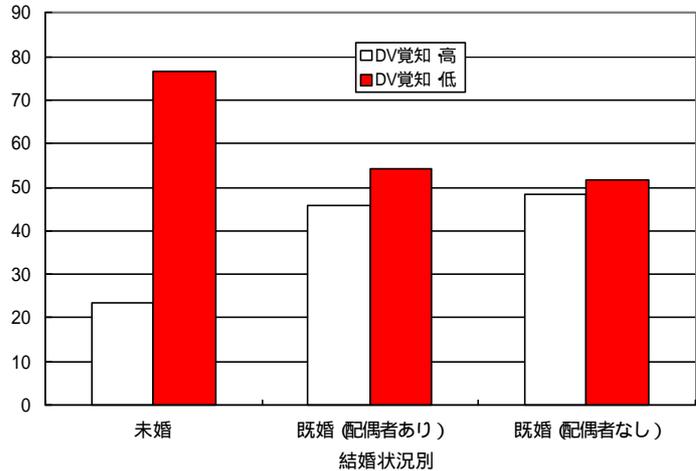
表12 結婚状況別 DV覚知の高低 / 女性の回答 %

	合計	DV覚知 高	DV覚知 低
合計	542	235	307
	100	43.4	56.6
既婚	422	193	229
	77.9	45.7	54.3
既婚 （配偶者なし）	56	27	29
	10.3	48.2	51.8
未婚	64	15	49
	11.8	23.4	76.6

2=11.9 p<.01

上 実数
下 :%

図12 結婚状況別 DV覚知 / 女性の回答



(2) 児童虐待

問 18 の設問 6 ~ 10 では子育てに関する態度を聞いた。5 つの設問はすべて子どもへの暴力（児童虐待）に当てはまるものであり「いきすぎたしつけ」と判断されるものである。

ジェンダー・フリー度と児童虐待に関連は見られなかった

<ジェンダー・フリー度の高低と「いきすぎたしつけ」との比較>

統計的に意味のある差は見られなかった。

「いきすぎたしつけ」に対する態度と回答者の属性を比較したところ、地域、年齢、結婚状況、家族人数、末子の年齢で統計的に意味のある差がみられた。

<男女別・いきすぎたしつけに対する態度と回答者の属性との比較>

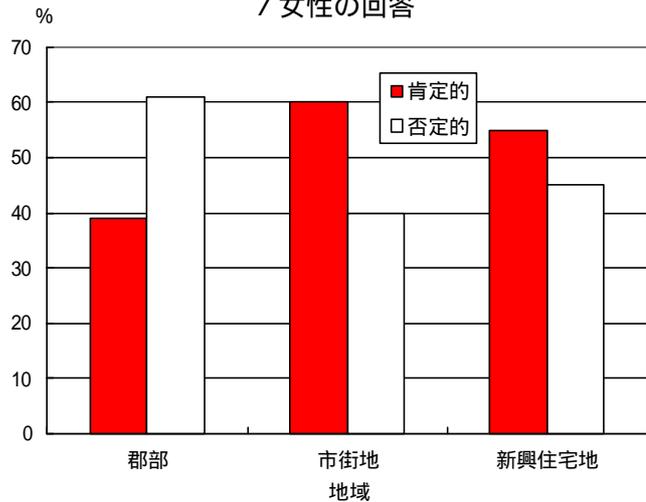
郡部では「いきすぎたしつけ」に反対の女性が多く、市街地・新興住宅地では「いきすぎたしつけ」に賛成の女性が多い。

まず回答者の住んでいる地域（市街地・郡部・新興住宅地）と「いきすぎたしつけ」に対する態度を比較すると、女性の回答に有意な差が見られた。郡部では設問にあるような「いきすぎたしつけ」に対して否定的な人が多かった。反対に市街地・新興住宅地では肯定的な人が多かった。

表13 地域別 「いきすぎたしつけ」に対する態度 / 女性の回答

	合計	肯定的	否定的
合計	557	297	260
	100	53.3	46.7
郡部	95	37	58
	17.1	39.0	61.1
市街地	118	71	47
	21.2	60.2	39.8
新興住宅地	344	189	155
	61.8	54.9	45.1
		2=10.5	p<.01
		上 :実数	下 :%

図13 地域別 「いきすぎたしつけ」に対する態度 / 女性の回答



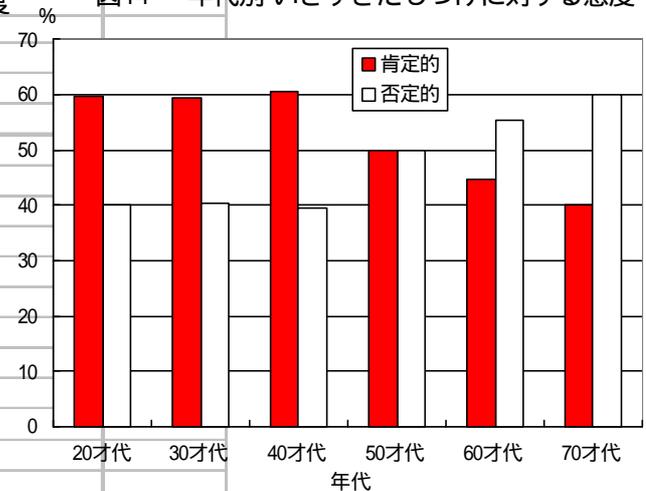
子育て世代には「いきすぎたしつけ」賛成派が多い

回答者の年齢と比較すると、20～40才代の比較的若い世代に「いきすぎたしつけ」を肯定する人が多かった。50才代で肯定・否定は同数となり、60～70才以上では否定的な人が多かった。実際に多くの方が子育てに従事していると思われる20～40才代で「いきすぎたしつけ」に肯定的な人が多かった。

表14 年代別 「いきすぎたしつけ」に対する態度

	合計	肯定的	否定的
合計	1018	558	460
	100	54.8	45.2
20才代	112	67	45
	11	59.8	40.2
30才代	215	128	87
	21.1	59.5	40.5
40才代	294	178	116
	28.9	60.5	39.5
50才代	200	100	100
	19.7	50.0	50.0
60才代	132	59	73
	13.0	44.7	55.3
70才代	65	26	39
	6.4	40.0	60.0
		2=20.1	p<.01
		上 :実数	下 :%

図14 年代別 いきすぎたしつけに対する態度



既婚（配偶者あり）の女性に「いきすぎたしつけ」に賛成が多かった

回答者の結婚状況と比較すると、女性について有意な差が見られた。未婚女性では「いきすぎたしつけ」に否定的な人が多かった。既婚（配偶者あり）で「いきすぎたしつけ」に対して肯定的な人が多かった。配偶者のない既婚者では否定的な人が多かった。

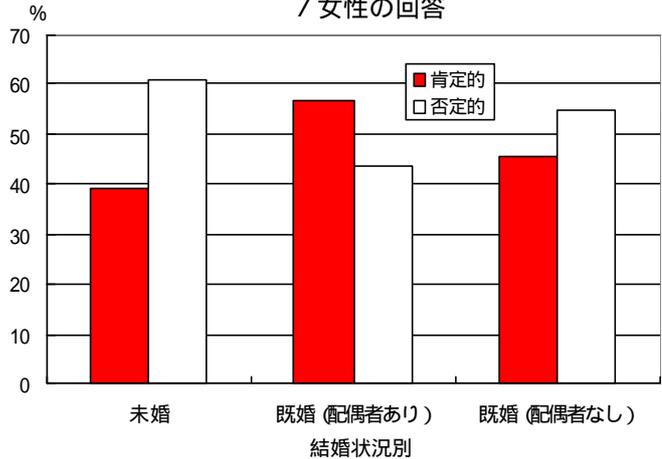
表15 結婚状況別 「いきすぎたしつけ」に対する態度 / 女性の回答

	合計	肯定的	否定的
合計	557	298	259
	100	53.5	46.5
既婚	438	248	190
	78.6	56.6	43.4
既婚 (配偶者なし)	55	25	30
	9.9	45.5	54.6
未婚	64	25	39
	11.5	39.1	60.9

上:実数
下:%

2=8.5 p<.05

図15 結婚状況別 「いきすぎたしつけ」に対する態度 / 女性の回答



家族の人数4人で「いきすぎたしつけ」賛成の女性が多かった

回答者の家族の人数と比較すると、女性の回答について有意な差が見られた。1人と答えた人は「いきすぎたしつけ」に対して否定的だった。4人になると肯定的な人は非常に多くなっていた。

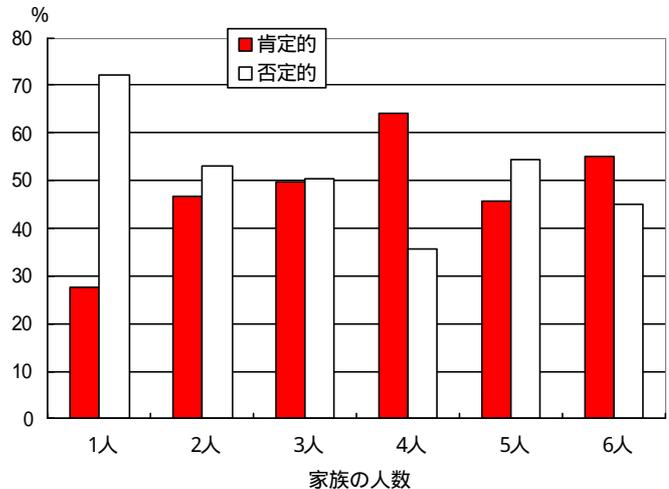
表16 家族の人数別 「いきすぎたしつけ」に対する態度 / 女性の回答

	合計	肯定的	否定的
合計	550	294	256
	100	53.5	46.6
1人	18	5	13
	3.3	27.8	72.2
2人	94	44	50
	17.1	46.8	53.2
3人	115	57	58
	20.9	49.6	50.4
4人	193	124	69
	35.1	64.3	35.8
5人	81	37	44
	14.7	45.7	54.3
6人以上	49	27	22
	8.9	55.1	44.9

上:実数
下:%

2=18.2 p<.01

図16 家族の人数別 「いきすぎたしつけ」に対する態度 / 女性の回答



末子の年齢22才までの子育て中の女性に「いきすぎたしつけ」賛成派が多かった

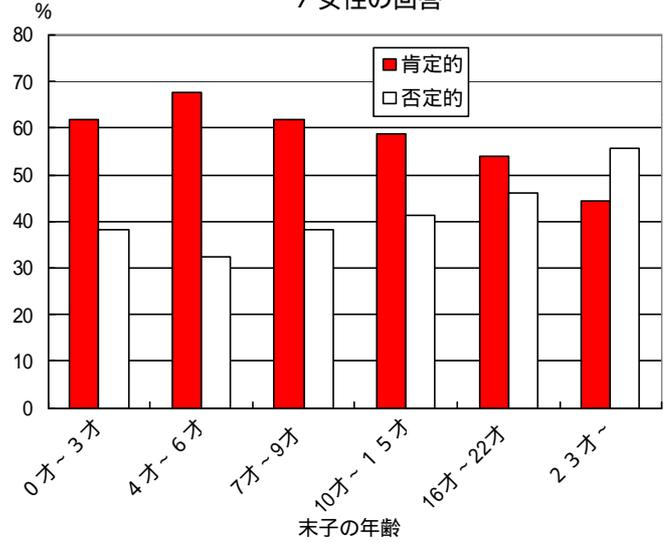
末子の年齢との比較で見ると、女性で統計的に意味のある差が見られた。末子の年齢が23才を越えると「いきすぎたしつけ」に否定的な人が多かった。一方、末子の年齢が0~22才まででは、「いきすぎたしつけ」に肯定的な人が多かった。これは、実際に子育て中である末子の年齢の低い人に「いきすぎたしつけ」に対して肯定的な態度が多い現実を表わしている。

表17 末子の年齢別 いきすぎたしつけに対する態度 / 女性の回答

	合計	肯定的	否定的
合計	454	249	205
	100	54.9	45.2
0~3才	63	39	24
	13.9	61.9	38.1
4~6才	37	25	12
	8.2	67.6	32.4
7~9才	55	34	21
	12.1	61.8	38.2
10~15才	85	50	35
	18.7	58.8	41.2
16~22才	65	35	30
	14.3	53.9	46.2
23才以上	149	66	83
	32.8	44.3	55.7

上 :実数
下 :%

図17 末子の年齢別 「いきすぎたしつけ」に対する態度 / 女性の回答



(3) セクシャル・ハラスメント

セクハラ認識度

問 31 では「男らしさ・女らしさのおしつけ」「身体的接触」「環境型ハラスメント」の3つの観点から設問をつくり、セクハラに対する認識度を聞いた。

<ジェンダー・フリー度の強弱とセクハラ認識度との比較>

統計的に意味のある差は見られなかった。

セクハラ認識度の高低と回答者の属性を比較したところ、性別、年齢で統計的に意味のある差が見られた。

<男女別・セクハラ認識度の高低と回答者の属性との比較>

女性はセクハラ認識度が高い

セクハラ認識度の高低と回答者の性別を比較した。女性ではセクハラ認識度の高い人が多かった。男性ではセクハラ認識度の低い人が多かった。

表18 性別 セクハラ認識度

	合計	セクハラ認識度・高	セクハラ認識度・低
合計	1056	563	493
	100	53.3	46.7
男性	474	226	248
	44.9	47.7	52.3
女性	582	337	245
	55.1	57.9	42.1

上 :実数
下 :%

図18 性別 セクハラ認識度

